英語の冠詞に関する一考察

河　本　　誠

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

(1998年10月5日　受理)

序

冠詞類（冠詞，所有代名詞）は，名詞に対して互いに排他的に働くものであるが，ある冠詞が使われると，他の冠詞で表される情報が犠牲になったり，明示されなくなるという認識を得た。極めて抽象的な言い方をすれば，各場面に応じて，冠詞類の中から最も重要な情報のものに絞って表現するということになる。

物質・抽象名詞などは無冠詞で扱うことができ，その扱いは日本語の名詞の扱いと極めて似ていることが分かった。無冠詞のままで全体の中の部分を表すことが出来るという点も同じである。

物質・抽象名詞に後方から限定表現が付いている場合，the を名詞に付けるかどうかは，その限定を受けた名詞が指し示す対象全体を意図するかどうかに依ることも分かった。

1　加算名詞と冠詞類

冠詞類の排他性

冠詞類は複数形を除き互いに排他的ということから，２つ以上指定する必要があるときは工夫が要る。それが例えば次のような表現となって現れると考えられる，

one of my friends

これと，次の形とは意味が異なる。

my friend, my friends, the friends

そして，冠詞類が単独で使用されるときには，他のの冠詞類の表す情報に関して，犠牲になるものが生じる可能性がある。例えば，

I went there with a friend.

において，a friend は one of my friends の代わりとして使えるとピーターセンも言うが，表現上は所有関係を表す語が全く表現されていないことが分かる。

冠　詞　類

加算名詞に付く冠詞類について次のような使い分けがあることはすでによく知られている。

① a computer　　(不特定の１つ)

② computers　　(不特定の複数)

③ the computer （特定の１つ）

④ the computers（特定の複数）

この使い分けは筆者も慣れて来ているが，注目すべきは“the が特定”という点であろう。この意味は，次の例でも明らかなように，「加算名詞が表す対象の集合全体を指し示す働きで，これはあらゆる場合に共通した特徴である」と言える。例えば，典型的なものとしては，次の形がある，

Some boys came in time, some on time and the others late.

ここでは，残り“全部”という意味で the otehrs が使われている。

さらに，他の例を挙げれば，「アメリカ人は同国人に対しては定冠詞なしの Americans を使い，決してthe Americans とは言わない」(20-１)，とピーターセン（'90）はいう。それに対して，彼らはthe Japanese という表現をよく使っているという。この無意識の扱いの違いについては，ピーターセンが詳しく述べているが，その違いを生み出しているのは「the の全体性，総称性」であると考えられる。冷戦時代のアメリカのパロディ映画のタイトル“The Russians are Coming! The Russians are Coming!”というのも，ピーターセンは「ロシア人が人間性のない『一枚岩的相手』に感じられるからこそ，アメリカ人はパニック状態になりやすい」(22)と述べているが，そのことを生じさせているのは「the の全体性，総称性」であると筆者は考える。

また，次の例を見てみよう。

This is the marathon.（これが最も重要なマラソンです）

この“the”用法も，theの全体性と marathon が単数であるということから来ており，その仕組みに不自然さはないことが分かる。

以上のことから，１つの結論的なものとして次の原則を導き出すことが出来る。それは，

the の総称性：the は該当する対象の（集合）全体を指し示す

というもの。ところが，不加算名詞に対する the については，そのような記述を見たことがない。実は不加算名詞においても加算名詞の場合と同じように定冠詞 the が扱われることを次に見る。

2 不加算名詞（物質・抽象名詞）

無冠詞で some の意味

不加算名詞の使い方に関してピーターセン（'90）は次のように書いている。

In Vienna, Mozart composed music for Joseph II.（18）

という例では，「この“music”は，“the music”とは違って，不定の some music である」。このことから，不加算名詞は some の意味ではどんな冠詞類の修飾もなしに使用できることが分かる。

無冠詞で all の意味（総称用法）

また，次の例では，

Blood is thicker than water.

Love is merely a madness.

sugar や blood の全体が表されており，物質名詞，抽象名詞がそのまま冠詞類なしに all の意味で使用できることが分かる。

これら2つの用法は，実は，日本語の名詞の使い方と同じである。別の言い方をすれば，不加算名詞は単独で用いられるような場合，表現上は量について規定されていない，ということになる。文脈によってだけ規定されることになる。

外界照応と物質名詞

以上のことから，物質名詞・抽象名詞には量的な限定を付けなくてもよい場合があることが分かった。そのままでも部分，全体を表すのに使えるのである。もちろん，量的な限定を付けたければ a cup of coffee のように付けることも自由である。これも考えてみれば日本語と同じである。結局，英語では，数に関係する冠詞は加算名詞に対してだけ発達して来ているということが分かる。

しかし，たとえ不加算名詞であっても，ある特定のものということを言う必要がある場合には，次の志村（77）のように前方照応や外界照応のtheが用いられる。

X-rays are produced in an X-ray tube. The air is pumped from this tube until less than one hundred-millionth of the original amount is left…．（引用者略）

志村（79）は，「もし“air”とすれば，それは不特定の“air”で，続く“pumped from this tube”の意味と矛盾する。従って，この場合は“the air”以外にはありえないのである」と説明している。日本語でも，この場合の the air は「その空気」というように“その”を付けるのと同じである。

無　冠　詞

そうすると，ある状況（場面）が与えられた場合，その中での抽象・物質名詞の使い方は微妙になってくる。次がそのようなピーターセン（‘88）の例である。

It is often noted that Japanese college students seldom ask questions in their classes and that this appears to be not simply because of shyness.（48-9）

筆者は，the shyness と the を付けたくなる。なぜなら Japanese college students を取り上げ，その設定の中で彼らの shyness という意味だからである。“because of＋普通名詞”のときには，当然何がしかの冠詞類が付くはずである。ところがこの場合，日本語の名詞の扱いに極めて近く，所有関係などは聞き手の側で補えというわけである。

ピーターセン（‘88）も，“because of（the）shyness”で「日本の大学生のもつ『shyness という気質』を一般的に言おうとしているだけであり，それ以上は限定していない」（49）と書いており，ある種の限定は認めている。ここが難しいところであるが，周囲の状況か

ら限定される外界照応のtheの用法ということではだめなのかという点である。なぜそうはならないのか。because of shyness がよいとすれば，それは機能的な使い方がされているからなのだろうか。日本の大学生を導入したのであれば，それに関連することは the を付けてもいいではないか。つまり，

今話題にしているこの大学生たちの shyness であるから，外界照応の“the”が付く要素はある

ということになる。しかしながら，考えてみると確かに，今の shyness はこの大学生だけが所有している shyness ではない。これは筆者も理解でき，ここがポイントなのかもしれない。従って，結論としては，the の使い方に関して，不加算名詞の場合には，加算名詞の場合とは扱いが異なる，ということが導かれる。

ピーターセンは the shyness にすると「どんな shyness なのか」と，前方照応の形で理解しようとしてしまうと述べている。そうすると，ここで the が付かないのは，むしろ，抽象名詞に the を付けると前方照応とみなされるので，そうしないということになりそうである。この場合，抽象名詞の shyness に対して誰の shyness かといったことは表現する必要がない，ということであり，これは日本語でも同じである点が面白い。

次にもう1つピーターセン（'88）の例を見てみよう，

When shopping for a new car. size is not the only important consideration. (33)

この size も抽象レベルが高く，size のままでよいのであろう。a new car を含めた車のサイズ一般ということである。それが，車に対して size と聞いて最初に想像されるようなものであり，他の size と迷うことはないので，無冠詞でいいということであろう。

加算名詞 vs 不加算名詞

やはり，ピーターセン（'88）の例を見てみよう。

Last night. I ate a chicken in the backyard. (10)

Last night. I ate chicken in the backyard.

この2つの文の比較すると，a chicken が鶏1羽であるのに対し，chicken の方は鶏肉の意味になるという。この点も恥ずかしながら筆者はあまりきちんと認識してはいなかった点である。

これはある単位を基にした1個，2個と数えることができる加算名詞の扱いと，単位性のない材料的なものとしての不加算名詞の扱いとの明確な違いから来ている。ここでやはり筆者が気になるのは，chicken だけの場合，物質名詞であって，量や所有関係などが全く表示されていない点である。文脈上からは some chicken の意味であることが分かるが，加算名詞のような数量や所有関係を言わなくてもよいということが注目されると思われる。これも日本語の名詞の扱いと極めて似ており，量を特に言いたいときだけ量の限定を付け加えるということになる。

大津（'93）は，in the night と at night の冠詞について次のように述べている。「the night

と普通名詞にすると，数えることができなければならないから『日没から日の出まで』あるいは『日没から12時まで』の夜の時間をさすことになる。だが， at や by の後には一夜分の夜は来ないから，夜を抽象名詞化して at night, by night とする」(65)。それに対し，「in the afternoon（午後に），in the day（昼間に）と言うように，前置詞を in にすれば in the night（夜の間のうちに）ということができる」とも言う。Chicken の例と比較してみると，同じ単位性に関する論理が働いていることが分かる。

日本語の名詞との類似性

たとえば，アメリカの家庭では，television set があるのは当たり前であるから，ある家庭を考えている場合，その家の television を“the television”と説明なしに使うことができることはよく知られている。ところが，実はこれは普通名詞の場合の話である。

不加算名詞ではそうではなく，上で見てきたように，これも日本語の場合と同じになる。日本語で特に名詞を限定する必要があるときには，“この”を付け足したりするが，そのことは英語でも同じであり，正に英語の不加算名詞の扱いは日本語の名詞に似ていると言える。従って，結論的には日本人にとって注意すべき点は加算名詞の扱いということになろう。

3　後置修飾冠と詞類

of phrase などによる後置修飾の付いた名詞に付ける冠詞類をどうすべきかについて，筆者には誤解があった。

後置修飾と冠詞類

安井（205）は定名詞句表現における the の機能は，「場面又は文脈を見てください。他ならぬあるものを示そうとしているものであることがすぐ分かるはずです」というように合図をする点にあるとする。確かに，安井の挙げる次の 2 文についてはこれでうまく説明できよう。

I met a girl who speaks Basque. (209)

I met the girl who speaks Basque. (209)

安井はさらにこの the の機能について考察を加え，次のように述べている

> こういう「ほかならぬ何か」を示す定冠詞の機能で特に注意しておくべき点は，ほかならぬ何かが，実際に，何であるかを突き止める段になると，定冠詞自体は，なんの働きもしないということである。定冠詞 the は，言うなれば「外ならぬものあり。場面，文脈を見よ。」という目印の旗はもっているにしても，みずから手を下すことは，いっさい，しないのである。実際に探すという作業は，すべて，聞き手の側における協力にゆだねられているわけである。(206)

つまり，安井は，

① the の機能は前方照応または外界照応の合図

② その対象確認は聞き手が行う

ということを述べていることになる。しかし，次のようなピーターセン（'88）の例についてはどうなるのか。

Japanese arranged marriage has recently become the subject of wide interest in the United States. (25)

この例では①の働きがあるとは言えない。つまり，安井は前方照応および外界照応でない後置修飾の場合を考慮に入れていない点が問題であると思われる。確かに"I met"に続くものとしては関係節が前提になっていると考えられるが，ピーターセンの例ではそうでないことは明白である。

そこで，筆者は次のように考えたい。それは

the の全体性：定冠詞 the については，次の名詞（句）で示される対象の集合全体を一まとめにするもの

これがピーターセン（'88）の言う"a"や"the"が「意味的カテゴリーを決める」(25) ということに対応するものである。彼は次のように言う，

一度名詞が a のカテゴリーに入れられたら，あるグループの中の一つに過ぎない存在となる。一度 the のカテゴリーに入れられたら，ある唯一の，特定のアイデンティティーを持っている存在となる (25)

「ある唯一」という箇所が"the"の様々な用法に共通する意味機能であると考えたい。そうすると，前方照応や後方照応の実際の作業は，the とは切り離された形で聞き手が行うわけである。

従って，the の前方照応，後方照応，外界照応などに共通する特徴として，筆者としては，本論文の最初の所に述べたように"特定化"であるが，さらに，「特定化された全体を指示す」と考える。その意味で

a [[girl] who speaks Basque]

the [[girl] who speaks Basque]

とでも表されるように，この 2 つは同じ形の分析で構わず，the については，後置修飾がない場合の定冠詞の扱いと同じであると筆者は考える。ただ，その場合，前方照応でうまく処理できなければ，後方照応の処理になる点が特徴的である。そして，ポイントは，名詞の単複に応じて the によって対象の集合が限定されていて，その全体が指定・限定されている点であると考える。後者は Basque 語を話す少女は一人で，その少女にあった。前者は Basque 語を話す二人以上の少女の一人に会ったことを意味する。

このような後置修飾がある場合にも，冠詞などは後置修飾がないときと同じように考えられることは，実際，次の金口の例のように後置修飾を伴った名詞に対して，その冠詞類として様々なものが現れることとも整合する，

① Work that is difficult is likely to be attractive to those who are able to do it. (20)

② The food which was served in the restaurant was very good. (20)

③ The fact remains that many people were lost in a shipwreck (20)

④ Fear came on me that he was dead (20)

⑤ As far as we could see, the miles of copper-red grass were drenched in sunlight that was stronger and fiercer than at ny other time of the day (265)

このように，後置修飾が付いた場合にも，冠詞類は様々なものが現われ，それは正に名詞（句）が表す対象に対する話者の限定を表していることになる。不加算名詞の場合にも，the というのは，限定がある場合にはそれで限定される全体を指すという所が共通しているのではないかと思われる。work の場合は some work ぐらいの意味で考えればいいのではないか。あるいは all work の意味でもよかろう。fear の場合も the fear でも構わないが，このまま some fear の気持ちであると考えてもよいのではないか。通常，文法書では，「限定している句を伴うときは the をつける」とあるが，そうでない場合もあることが上の例からもはっきりしていて，the はやはり該当する対象の集合論的な限定の仕方を規定しているということになる。

そうすると，the の機能は次のようにまとめられる，

① 対象全体を意味する

② その全体は，実際には，前方照応，外界照応のほか，後方照応で決まる

③ 対象確認は聞き手が行う

ピーターセン（'90）も次の例を挙げ，ここでの the について次にように説明している，

The music for *My Fair Lady* was composed by Frederick Loewe. (17)

に対し，「この "the music for *My Fair Lady*" という英語を言い換えれば "all of *My Fair Lady's* music" という意味になる」と。

かつて筆者が学生のころ，同じ英語コースで勉強していた学生が論文を書いていた。この論文のタイトルが実際は Chaucer ではないが，"The Language of Chaucer" というものであった。論文の中間発表のとき，ひとりの教授が「Chaucer の言語の一研究であるのに the を付けることは適切でない」と述べたのを思い出す。Chaucer の言語全般を研究したのならともかく，そうではないから駄目であるというのである。当時は余り気にもしていなかったが，今考えるとなるほどと感心するばかりである。

前置修飾 vs. 後置修飾

名詞に対する形容詞などによる前置修飾と of phrase などによる後置修飾には付けるべき冠詞類に関して違いがある。

① the [[translation] by machines]

② = [machine translation]

前者に付いては，これまでの結論から言えば，by machines で限定された translation 全体という意味で the が付いていて，後者の場合は，machine translation という一塊の抽

象概念で1つの抽象名詞と同じになるが，これら両者がほぼ同じ意味であると考えられる。ところが，後者の場合に全体に冠詞が付くと，1つの名詞の場合と同じように，the が付いていることから前方照応，外界照応ということがまず考えられ，そうでないとすれば，総称用法となるが，その理解を許す文内容は実際には極めて限られていると思われる。そこで，やはり量的に規制を受けない形で提示しようとすれば冠詞なしの抽象化された machine translation が適当であると理解される。

結論：machine translation のように，前置修飾を伴う名詞句は，単独の名詞だけのものと冠詞類に関して同じ扱いとなる

ピーターセン（'88）が余分な the の例として挙げている次の文は，内容から総称性の理解が無理である。

*The recent important studies have been made into the causes of bullying (26)

文内容と関係させて考えてみると，"The recent important studies" の部分は，前方照応としてしか理解されず，それが照応できないところに不適格になる原因があるということになる。

以上のような例の比較から，次の重要な予想が考えられる：

予想：後置修飾が付いた名詞句（the translation by machines）においては，the は前置照応，外界照応になり得ない。

この途中の the translation までの段階では，あらゆる照応関係の可能性があり，その後の修飾によって，後方照応に絞られてしまうという図式が得られる。その意味で "the" の意味は他の場合の "the" の用法と同じであり，後方照応の "the" の用法というのはやや語弊があるのではなかろうか。

西村（161）は，「the heart of America」という表現に対し，「the になるのは of 以下の規定によってただ一つにしぼり込まれる場合である」としている。the の全体性ということを別の形で述べているものと考えられるが，西村はその直後に，「抽象名詞の場合は，もともと一つだから of がくると自動的に the があたまにつく」と述べている。しかし，次のように the が付くときと続かないときの両方の形（金口）を目にすると，the の全体性が働いているため，としか考えられない。

Love of power, like vanity, is a strong element in normal human nature. (13)

The love of scandal is an expression of this general malevolence. (13)

the による総称用法として篠田が挙げている次の例は，文内容から the transistor の総称性が導き出せるから，その解釈が成立するのであるといえる。

The transistor is an electronic semiconductor device with three or more electrodes (32)

文の総称性を述べていることが文脈から明白なときにだけ the の総称用法が成立すると考えられる。

ここでの結論

of phrase などによる後置修飾を伴う場合でも，the や a などの冠詞の扱いに関しては，通常の名詞だけの場合と同じであると考えてよい。加算名詞の場合には a，the が付いたり，複数形になり，一方，不加算名詞の場合には無冠詞，定冠詞などになるが，the に共通する特徴は次のようになる，

the というのは，その後の名詞句が示す対象全体を指示するということを意味し，前方照応，後方照応，外界照応，総称性などはその集合の決定の仕方に過ぎない。

4 所有代名詞

所有代名詞と冠詞

筆者はかつて次のような人称代名詞の使い方を非常に奇妙に思ったものである，

He's eating his breakfast.

なぜ a breakfast ではないのか。筆者は，これを breakfast は各自に当然のものとして割り当てられたものという意識が働いているため，ぐらいに考えていた。これを説明するのが次のピーターセン（'90）の例文である。

私　：　What did you do on Sunday?（日曜日，何をしましたか？）(56)

学生：I went to a movie.（映画に行きました。）

私　：Who（m）did you go with?（誰と行ったのですか？）

学生：*I went with my friend.（私の友だちと一緒だったんです。）

この例においては，新たに友だちを文脈の中に出す形としては適切ではない，という。「決まった一人，例の友だち」という意味になるからという。しかし，amy dog の場合には，次のように問題ないという。

I was out walking my dog when I noticed that the woman walking in front of me had a whole lot of baby spiders crawling around in her hair. (59)

この 2 つの違いは何かと考えてみたい。まず，

人とその friend，人とその dog

ということで，人に対してその人の関連物を文脈に導入するという意味では同じようなものである。しかし，my do の場合は，各家庭に通常一匹かっている犬という前提から来る表現であり，それに対し，a dog の場合，my dog と異なり，「自分でペットとして飼っている犬ではなく『ある犬を連れて』という表現」になり（p. 46），複数の dogs の中の一匹という意味になる，とピーターセンは述べている。friend の場合は，犬の場合の前提とはまた違う。従ってこのような違いは，friend や dog の人に対する個別の関係から来ているとしか考えられない。このことから，所有代名詞を付けるのが適切な場合というのは，

① 基準になる人に関係するものであって（所有関係）

② 不定冠詞を付けた場合と違いが生じる

とき，ということになる。この基準で見ると，

(a) a friendとmy friend では②で前提となっている friend 全体の個数的なものが異なる

(b) a dogとmy dog では①の所有関係と個数的なものが異なる。

そう考えると，元に戻って a breakfast と his breakfast とでは②に関して違いがあるのではなかろうか。即ち，例えば

a breakfast のほうが喫茶店のような場所での朝食

his breakfast のほうは自分の家でのいつもの朝食

といった違いが生まれるものと考えられる。

以上のことから，通常，次のような冠詞類の選択手順が得られる（単数の場合）

① 無冠詞では駄目か

② a では駄目か（複数の中の１つ）

③ the では駄目か（前方照応であるか）

④ 所有代名詞は駄目か（名詞が単数であればただ１つを意味する）

（①②③④は互いに排他的）

これに関してやはりピーターセンの主張から，breakfast の例では次のようになる(p. 60)。それは

① ただの breakfast では抽象名詞としての扱いとなる，

② a breakfast では，選択肢がある中での１つということになる，

③ the breakfast では，例の朝食ということになる

④ これらのどれもがうまくいかないということで my breakfast しかない

というものである。He's eating に続くものとしては①や②は適当ではない。この場合，所有代名詞の my について，ピーターセンは，他と区別して「私の」という意味は強くないとも言っている。

さらに例を挙げれば

① She put it in one of her microwaves. (microwave が初出)

においては，microwave に関して数と所有関係が共に表現されている。

② She put it in her microwave to dry it off. (microwave が初出)

では，microwave に関して，her が付いていることから，やはり単数であるということと所有関係が示されている。しかし，所有関係に関しては日本語同様，表示されない場合が多い。ピーターセンも①で彼女が microwave を２つ以上持っている場合には，②と同じ意味で

She put it in a microwave.

が可能としている。同様に，

I went with one of my friends.

= I went with a friend.

となる。このことから，我々母国語が日本語である日本人は，

加算名詞に関して，特に数だけを明示するよう気をつけなければならない

ということが言える。

所有代名詞と外界照応の the

また，ピーターセン（'88）は次のような対比関係も存在するという。

① This actually happened to a Chicago woman. a friend of my mother. One day her cat came in out of the rain all wet, so she put it in her microwave to dry it off…．（引用者略）(43)

② She put it in the freezer to cool it off. (44)

これらの例で，her microwave と the freezer の使い分けについて，the と her の微妙な使い方の違いが示されているという。ピーターセンは，「冷蔵庫というものは，どの家庭にでもあるというふうに意識されるが，電子レンジはまだそこまで普及していない。どの家にでも当然電子レンジがあるという意識は，近い将来にできるかもしれないが，今はまだない。その冷蔵庫との意識の違いを her と the の使い分けで表現する」と言うのである（44-5）。所属関係を表す部分が全くなく，外界照応になるというところに the による限定の特徴がよく現れている。

所有代名詞と不加算名詞

抽象・物質名詞に対する無冠詞と定冠詞との違いについては前節で述べたところである。ピーターセン（'90）の次の例を見てみよう。

I was out walking my dog when I noticed that the woman walking is front of me had a whole lot of baby spiders crawling around in her hair. (59)

hair だけの場合，彼女の髪の毛を意味しないとピーターセンが述べていることから，ここには hair と her hair の対比が存在することが分かる。無冠詞では所有関係が薄いということを示している。また，前方照応の the hair も文脈上使用できない。すでに導入済みというわけではないから。

抽象・物質概念も，普通名詞と同じように，その所有関係と量の指定が考えられる。抽象・物質名詞は，前方照応がなく，所属関係が薄いときには the を付けず，実際，所属関係など言う必要がない場合が多い，と言えるのではないか。

① Rain tends to fall only very lightly in south-central Spain during the summer months. (13)

② *He is drinking his water.

②が適格でないのは，常識的に所有関係が認め難いためと考えられる。以上の内容は言われてみればなるほどと思われるが，筆者にとって新しく到達した認識である。

5 固有名詞

筆者は the sun などの表現を目にするにつけ，固有名詞と普通名詞の区別は何かと考えさせられ，次の大津と同じ結論に達していた，

普通名詞とは同一の種族に属して個体差のないもの。(67)

その各個体を区別するのが固有名詞ということである。この点が固有名詞が物質名詞や普通名詞と異なるところであろう。

固有名詞と the

固有名詞に the が付く場合がある。これについては分類がなされているが原則などは全くないと考えていたけれども，ピーターセン ('88) は次のような1つの原則を述べている。

本当は U. S. A. に the がつくのは固有名詞だから，あるいは国名だからではなく，普通名詞の states があるからである。The Mississippi River も同じである。川の名前だからではなく，普通名詞の river があるから the がつくのである。この二つの例は，厳密に言えば，それぞれ the states which are united/the river named Mississippi という論理に従った the の使い方である。(6-7)

大津はさらに次のようなものもその同種として挙げている，

the English, the Alps, the Philippines, the Thames

これらは「本来は people, mountain, river のような集合名詞や普通名詞を伴った表現が短縮されたものであるから，冠詞が残っているのである」と大津 (64) は考える。また，次のようにも付け加えている，

「本来は普通名詞であるはずなのに冠詞がつかない場合もある。Lake Michigan（ミシガン湖)，Pearl Harbor（真珠湾)，John F. Kennedy Airport（ケネディ空港）などのように，湖，港，空港のひとつである。だがこの場合は，湖や港や空港のひとつを特定する表現としてではなく，むしろ地名として意識されているので，固有名詞化して冠詞が落ちているのである。」(64)

同じように西村は，固有名詞化に関して次のような説を述べている。

裸の普通名詞 united states に the を付けると the United States と固有名詞化される。更にこの固有名詞化が進むと名前になってしまい the がとれていく傾向にある」(188)

そして the Union Oyster House から Union Oyster への変化を実例として挙げている。

以上の原則で説明できないものは数え切れないほどあると思われるけれども，以上の原則は極めて重要であると思う。

最初に示した the sun については，上の議論から最終的には1つしかない普通名詞に the が付いているという考え方が妥当であろう。

6 冠詞の現れる位置

topic の位置

同一のものを指している場合でも，冠詞を含め，それを表す表現が異なることが次の安井の例から分かる，

The eagle is a bird of pray. (65)

eagle という対象に対し，“the eagle” という表現と共に “a bird of pray” という表現が使われている。即ち，ものに対して様々な見方，捉え方があるということである。

英語では，主語の位置が各文での topic を提示する機能を通常持っている。つまり，「～について」というのが主語の位置である。そうすると，これまでよく研究されているように，それは，主に，旧情報的なものが来るのがふさわしい位置である。従って，上の例では，

① 前方照応的に the eagle が特定の既に話題になっているものを示している

か，そうでなければ

② 総称的な用法である

ということになる。

次のように，不定冠詞のついた名詞が主語の位置にある文はどうであろうか，

A rat is larger than a mouse. (66)

このような形で a rat が文脈の中に初めて出てくるとすれば a rat は種を表す総称用法ということに解釈され易いといえる。すなわち，総称用法の名詞などは，残りの部分を含んだ文全体の内容に依存しているが，特に topic の位置に関係している。

それでは物質名詞が主語の位置に来る場合はどうであろうか。

Blood is thicker than water. (60)

これも，特定の blood というのではなく，抽象として総称的な blood の意味である。そして，それについての記述になっている。特定の blood というのであれば，当然，the blood などとなるからである。blood の一般的性格について述べているので，無冠詞の blood の形が適している。しかし，この場合，不加算名詞である blood は，前にも述べたように具体的なものとしてはそのままの形で用いられる可能性もあるが，topic の位置にあるから抽象度が高い形の使用であり，結局総称的用法ということになる。

以上，総称的な用法を見たが，主語の位置は大体 topic を示しており，この位置での冠詞の間違いはかなり決定的なものなってくるのではなかろうか。したがって，日本人としては，特にこの部分に注意が必要であると思われる。言い換えれば，前方照応の the でないような場合には，特に注意が必要であろう。

述部の位置

主語の位置が topic の位置であるとすると，その残りの部分は述部であって，ここでの冠詞はどのようになっているのであろうか。あるいは，名詞を修飾するような細部の部品に当たるところではどうなっているのだろうか。すぐに分かるのは，冠詞が付かない形が

結構あるということである。

次のような場合，前置詞句は機能，役割を述べていて，冠詞が付かないことが多く，また，数の区別も余り気にしないようである。たとえ for 以降が具体的なものであってもそうである。

study for examination

articles for sale

for start

これらの前置詞句の中の名詞は，抽象度が高い使われ方，あるいは細かい情報を省いた言い方といえる。従って，topic の位置の名詞とは扱いがかなり異なっていることが分かる。

篠田は「all the evening の場合に，the を落としたからとて，内容に相違をきたすだろうか。ほとんどの場合，同じに扱ってくれるのではないかと思う。そこで，われわれのような non-native English speaker は，冠詞の有無により，内容が違ってしまう場合を，まず，しっかりと学習し，ついで，イディオム的なものに進むのが常道と思える」(26) と述べている。筆者も同感だが，そういう意味では，topic の位置での間違いが典型的に内容が違ってしまう場合に相当し，述部などではそうでもない場合が多いのではないかと感じている。native に自分の英文を check してもらったときなど，彼らにとってあまり気にならない冠詞の位置があるものだと実感していたが，そのことと関係していると思われる。

7 その他

冠詞類の様々な性質を見て来たわけであるが，その他に加算・不加算名詞のいずれにも共通するような，そして微妙な側面が浮かび上がってきた。

具象 vs. 抽象

(1) 普通名詞が抽象的なものとして扱われる場合—抽象性が高くなると，無冠詞の可能性

一般に普通名詞と言われているものでも，抽象的な扱いをすることがある。例えば，rope の定義として，ピーターセン（'90）は次の例を挙げ，

The clerk recommended cotton rope, rather than hard nylon rope, as a superior material for tying up sleepwalking husbands. (30)

不加算名詞として使われているとしている。従って，普通名詞と言われているものでも，抽象的に扱いたいときと，そうでないときの区別が存在する。

(2) 不加算名詞が普通名詞として使われる場合—具象性が高くなると，冠詞類がつく可能性ピーターセン（'90）は次のような具象化されている場合の例文を取り上げている（sweetness と light）。

抽象名詞の場合：

She made me try the inaka-jikuro. It had a strange, persistent sweetness-quite unlike any of the other unusual sweetnesses that I had encountered… （引用者

略）（31-2）

物質名詞の場合：

Flying over Hong Kong for the first time at night, we were amazed once again at the magnificence of the city lights. (32)

日本語においては冠詞以外の部分で抽象性の度合いを変化させたりすることがある。

例えば「～というもの」などにより抽象化が表される。

このように，どのような名詞でも，それが使われる文脈の中での役割に応じて，具体的，抽象的な扱いをすることができ，それが冠詞類や複数形によってなされたり，またそれらにに反映されたりする。通常，普通名詞，抽象名詞などといわれているものも，文脈の中ではそれらの抽象度が変化するということである。

視　　点

西村は複数形というものを次のように見る，

複数に見えるから正確に複数で表現しただけのことであろう。この点では，著者の態度は自然科学者らしく厳密である。…(途中引用者略)…複数形の連続というのは，著者が，情景全体を見渡せる高い所から見ていることを示している。つまり冠詞を読み取ることで著者の立っている位置が正確にわかってくるのである。(163)

ここでは物理的な見え方に関して複数形が使われることを述べているものである。しかし，これは，非物理的な場合にも適用されよう。西村は別の所で，

「さきに，単数と複数のもともとの意味の違いは1か2以上かという数学的なものではなく，対象との距離をあらわす心理的なものではないかと指摘した。つまり対象に近づいて一つをはっきり見ているか遠くにいていくつかでごちゃごちゃ見えるかのちがいではないかという考えである」

筆者には，これは文体論的に極めて興味深い指摘であると思われる。

会話の原則

次の文はどのようなとき使用されるのだろうか。

He killed a man in the morning.

相手に情報を伝えるとき，どのようなとき a man となるのか。自分では a man が誰か知っていても，相手に具体性を示す必要がないときは a man になるはずである。

I was walking a dog…

という表現に対して，ピーターセンは「不定冠詞の“a dog”だったら，自分でペットとして飼っている犬ではなく，『ある犬を連れて』という表現であるので，ここではふさわしくない」と書いている。しかし，同じ現実描写でも，単に犬であればよいと考える場合もあり，自分の犬でありながらも情報をあえて控えた形の“a dog”が使われる場合も考えられる。つまり，“a dog”だったら，自分のペットでないというのは一般論としては言い過ぎで，実は文脈が関係してくるはずである。つまり，過度の情報を提供しないという会話の

原則があり，それとの微妙な絡みが出てくることになろう。

初出の名詞

I went there with my friend.

の形の文は，my friend が文脈に初めて出るものとしては適切でない。なぜなら，それは my friend が「世の中で唯一の友だち」という意味になるからということはよく言われる。このことから，物事を初めて導入しようとするときには，所有代名詞の使い方に十分気を付けなければならない。このことは昔から言われてきていることであるが，すでに述べたように問題の根本は数の問題ではないだろうか。単数ということから，友達は通常複数いるはずという常識との食い違いで不適切さが生まれる。従って，

I went with my kids.

は初出でも適切なはずである。

このことから所有代名詞と the は，所有関係の表示ということを除いては同じであり，したがって所有代名詞を伴った名詞概念を文脈の中に初めて導入するときには，全体という意味を伴っているということが注意すべき点である。それは前方照応ではないときの the の使い方と同じであり，逆に，すでに導入済みのものに対して所有代名詞を使うのは，the の前方照応の使い方と同じである。そこで，次の重要な結論が得られることになる，

結論：所有関係を除いては，所有代名詞は定冠詞 the と扱いが同じである

従って，文脈の中で新しい名詞概念を導入する場合，所有代名詞を使うときは，the と同じく，数に関する注意が特に必要であるということになる。

Works Cited

大津栄一郎：「英語の感覚（上）」岩波書店．1993.
金口儀明：「英語冠詞活用辞典」大修館書店．1970.
篠田義明：「工業英文作成のコツ」南雲堂．1979.
志村史夫：「理科系の英語」丸善株式会社．1995.
西村　肇：「サバイバル英語のすすめ」ちくま書房．1995.
マーク・ピーターセン：「日本人の英語」岩波書店．1988.
マーク・ピーターセン：「日本人の英語」岩波書店．1990.
安井　稔：「新しい聞き手の文法」大修館書店．1978.

A Study on the Articles in English

Makoto KOMOTO

Okayama University of Science,
Ridai-cho 1-1, Okayama 700-0005, Japan
(Received October 5, 1998)

Articles and possessive pronouns in English are exclusive with each other when used as a modifier to a noun. They are, however, not necessarily exclusive with each other with respect to their meaning, but sometimes complementary. That's why when a certain article or possessive pronoun is used, something might be sacrificed because of the exclusive use of them. So, it can be concluded that the most necessary and important one is picked up in a given situation and guessing work of other information has to be employed by the listener's side. We will see what will be verbalized and what will be guessed and also the way to attach more than one of them to a noun at the same time.

Abstract and material nouns are similar to Japanese nouns in that both of them can have no articles attached to them. We have considered when we should attach the definite article "the" to a noun when it is modified by, for example, a prepositional post-modifier. We have also found that the common fundamental characteristic of "the" is to cover all the target "objects" that are signified by this modified noun.